

漁況海況予報事業*

杉村 允三・竹内 淳一・吉村 晃一
阪本 俊雄・仲井 孝夫 他 6 名

本事業は、特定研究開発促進事業の漁況海況予報事業費補助金による補助事業として実施した。調査の内容及び海況、漁況の特徴は下記のとおりである。詳細については別途刊行する「昭和57年度漁況海況予報事業結果報告書」に報告する予定である。

1. 調査の内容

- 1) 定線調査(沖合, 沿岸, 浅海)
- 2) 漁場一斉調査(モジャコ等)
- 3) 標本漁船調査(曳縄漁業, カツオ竿釣漁業, スルメイカ釣漁業)
- 4) 漁況海況情報並びに海況速報作成

2. 漁況海況の特徴

1) 海況の特徴

昭和56年秋季頃より、再び熊野灘南東域に規模のやや大きい(200m深水温: 8~11℃)冷水塊(都井岬沖に発生した低水温域の東方波及による)が居坐り始め、本県沿岸域でもその影響が見られ出した。

(1) 潮岬南沖の黒潮主軸位置; 全期を通して離岸傾向が続き、前半「かなり離岸」(56~85海里)、後半「やや離岸」(26~55海里)の状態にあった。ただ、主軸域では、離岸傾向を示していた割りに東及び東南東流並びに3ノット以上の流速の出現頻度が各々高かった(60%前後)ことから、今後の黒潮の動向が注目された。

(2) 分枝流; 紀伊水道域では、紀南分枝流を中心に出現し東径135度沿い並びに枯木灘域への差し込みが見られた。しかし、水道内部域への北上流入する機会は全般に少なく、春~初夏の一時期形成されたに過ぎなかった。このため内海系水の南下流出は、概ね水道西側域で活発であった。一方、熊野灘分枝流は、潮岬南東域よりやや沖合を陸に平行な流れと緯度線に直交する流れの二流が暖水舌となって出現したが、冷水塊形成時によく見られる黒潮内側反流の影響は殆んどなかった。

(3) 沿岸水温; 紀伊水道内・外域では「平年並」(-0.6~+0.6℃)であった。一方、枯木灘域では、前半「かなり低目」(-2.0~-1.3℃)で経過し、後半「平年並」か「やや低目」(-1.3~-0.6℃)まで回復した。しかし、夏季(8月)熊野灘を除く海域の各観測層で「著しく低目」(-2.0℃以下)となり、特に、枯木灘域の50~100m深では平年に比べ3~4℃も低目となった。これは、湧昇流による内側低温帯の活動が盛んであったことが考えられた。

* 漁況海況予報事業費による。

2) 漁況の特徴

(1) マイワシ；太平洋系群の資源は、引き続き高水準にあって産卵親魚の補給も順調に行なわれた。特に、晩冬～春季にかけ紀伊水道域に來遊した中羽群の漁獲量は著しく増大し、好漁年といわれた昭和55年度の7割増しとなった。

(2) カタクチイワシ；資源は、全国的に見ても未だ低水準にある。ただ、南西海区外海域の紀伊水道や枯木灘域では春・夏季における産卵量が増加し始めた。しかし、昭和57年度の漁獲状況は、晩秋～初冬季にかけて熊野灘沿岸域で昭和51年来久しぶりに小・中羽群が姿を見せ上向きとなった。一方、盛秋季の一時期に紀伊水道域でも同型群が漁獲されたが、僅少であった。

(3) ウルメイワシ；南西海区域における資源は、小幅な年変動を繰り返しながら、ここ数年減少を辿る魚種となった。本県沿岸域における漁獲状況は、來遊量が一時的に増大していた前年度に比較して、紀伊水道域における夏季の中羽群の減少が目立った。

(4) シラス；南西海区域におけるシラスの漁獲量は、主体がマシラスであったものがイワシ親魚群の出現傾向と良く類似し、昭和57年に入ってカタクチシラスの増加が目立ち始めた。このため、本県でも春季にマシラス、夏季にはカタクチシラスが対象となり増加への兆候が見られた。

(5) マアジ；資源水準は著しく低く、南西海区域への主補給群であった東シナ海中部系群の激減で、ここ十数年来この海域からの補給が少なくローカル性を強めている。紀伊水道沖合域の中・大型群と沿岸域の小型群の來遊は順調に行なわれたが、逆に熊野灘域への小・中型群の出現は、前年よりも一段と低くなった。

(6) サバ類；南西海区域におけるサバ類の漁獲量は、ここ数年増加し昭和40年以降で最高の漁獲となっている。ただ、この傾向の中にはゴマサバの増大が起因するとも考えられている。しかし、本県沿岸域の昭和57年度のサバ類には減少傾向が窺え、紀伊水道域で全期を通して中・大型魚の來遊が著しく低下した。一方、熊野灘域では、初冬季に過去に例を見ない程の中型魚が漁獲されたが、総体的には來遊量は少なく低調であった。また、前年度よりゴマサバの混入率が本県沿岸域でも高くなり今後の動きに注目する必要がある。

(7) カツオ；曳縄漁業は、例年になく早く3月下旬頃より2才魚を対象に始まり、盛漁期の5月には過去数例しかない程の好漁となった。この來遊状況が竿釣漁業へはつながらず潮岬南東域に設置された「漬」を主漁場とし操業したが、6月下旬には早くも枯木灘域の瀬付き漁場へ移動し來遊量も更に低下した。ただ10月上・中旬には南下瀬付き群を対象に珍しく多獲された。

(8) ブリ；熊野灘南部域の4ヶ統による昭和57年ブリ数年度の親魚総水揚げ尾数は、3,600尾程度で前年度の $\frac{1}{3}$ まで低下した。全漁期を通して8kg級(4才魚)の小型群が主体であった。

(9) ヨコワ(クロマグロ幼魚)；曳縄漁業が夏季対象とする小ヨコワの來遊は、前年度に引き続き低調であった。また初冬季より1.8～3.2kg級の來遊が例年より早く見られたが、量的に少なく散発的に漁獲されたに過ぎなかった。

(10) スルメイカ；南西海区域では、昭和55年に急増しその後も多獲されている。夏イカ漁場は、枯木灘中・北部並びに紀伊水道外域であった。特に、枯木灘北部域が中心となり8月以降20cm以上の群が増大し、10月中・下旬には25cm(28cm以上の群混る)群も多獲され初冬季まで続いた。一方、熊野灘域では昭和57年漁期が例年より早く10月中旬頃より始まり、過去十年間では最高の水揚

げを記録した。しかし好漁年に当る昭和44年度漁期の $\frac{1}{6}$ に過ぎないが、この海域でも徐々にではあるが増加の兆が見られ始めた。

